同窓会会報
第14号
昭和45年12月25日
発行所
茨城県東茨城郡
内原町鯉渕5965
鯉渕学園同窓会
印刷所
山田軽印刷所

新学園長を迎えて学園の中興を期す

同窓会々長　和田文雄

秋浜新学園長を迎えて、わが鯉渕学園は中興の第一歩をふみ出しました。

七月に全国支部長会議が開らかれたとき、学園長の選任を早くするよう農民教育協会に申し入れを行ったところですが、幸い九月一日付で秋浜新学園長が就任されましたことは同窓生一同心から喜びたいと存じます。

就任早々、秋浜学園長は四十六年度予算編成をめぐって農林省、大蔵省と連日接しょうのため奮斗しておられます。そしてその学園、協会の根本的な欠陥であった、農林省、大蔵省に対する非協調的な方向を改めるための措置を講じてこられ、十一月末には、十年前、大蔵省、農林省が指示した学園の経営に関する基本問題で了解を得るに成功いたしました。

しかし、これを書いている時点ではなお、四十六年度補助金は、予算の内示を得るまでは私どもは心配しているところであります。

十年前に大蔵省が補助金に対する経営の方向を提出するように求めていたものが、何故今日まで遅延していたのか、全く理解に苦るしむところでありますが、同種の補助金をうけている日本国民高等学校、八ケ岳中央経営伝習農場ではとうにその計画を樹て実行に移っているのです。こうしたことからもわが鯉渕学園に対する評価は芳しいものではなかったのです。

いかなる各目にせよ、国費の助成をうけている以上助成の目的にそってそれは使われるべきであり、その効果のある使い方、将来の経費の所要額について報告を求められればそれを提出するのが当然のことでありましょう。私ども卒業生は少くともそれが、通常の状態で処置されていたと理解していました。

さて、四十五年度の経費は三年制移行に伴う経費、農協科廃止に伴う経費が、農業団体から助成されていないため農林省の助成を大巾に増してもらわないと建設施設が間に合わなくなる。また農村生活科を生活栄養科に改めたのも農協団体が農協科を廃止して、そのまま中央協同組合学園に移してほしいとする要望をそっくりそのまま了承したことにはじまるわけでありますが、その代償となるべきものはすべて経費の増嵩であります。そして農協団体からはそれに見合う助成は目下のところ具体的に決っていないようであります。東畑協会長と宮脇全中会長の最高会談でとりきめられた事項の中でいずれ処置されることと期待したいものであります。

十年前からの大蔵省の意向に対して、学園は人件費の自己調達をはかり、国からの助成を節減してゆく方針をつくりましたが、それは約六ヘクタールの開墾による農場の造成をはじめ、五、〇〇〇平方米のビニールハウスなど施設園芸、乳牛を毎年二頭増加させ八十頭とする酪農場計画などで農場収益をあげながら人件費をまかなう方針をきめております。

そしてそれらの先頭に立って、必要であれば農場の草とりも自らもやるといわれて秋浜学園長は財政、教育の中興をはかっておられる次第です。秋浜学園長は北陸農試場長として開設のとき四回関止治君とともに農場の除草も建設もされたことがありそのときの関君の活躍を知っておられるため学園にその力があると信じておられます。

卒業生の皆さん、学園の教職員の皆さん、自ら汗して農作業を実践してゆこうとする気概が鯉渕学園から消滅していた時代もありました。自らは農作業を嫌う指導的立場の人もいました。どうぞ、そういう人はおひきとり頂いて結構です。学園の真の発展は協同論をとなえることではなく協同の精神で協調し実践することです。そして汗と土にまみれるなかに本当の名誉があるのです。その精神のないところに真の学園の発展はのぞめないのであります。

過去十年余にわたって混迷した母校が、秋浜新学園長のもとに再興してゆく姿が眼に見えるようです。

同窓生皆さんの一層のご協力をお願いする次第であります。

さて、昨年大会以来、検討を加えて参りました学園の卒業生を中心にした農業研究および農政と現場との触媒となることを目的とした「鯉渕学報」も新年とともに創刊号を発行するはこびとなりました。卒業生の社会での活躍がわが国農業界に提供され、そして皆さんのお手もとにとどくことでありましょう。是非一冊以上購読して頂きたいと思います。

学園が農林省の助成のもとに資金的な安定を得て、なお農協団体等の援助のもとにわが国農業の真の教育機関として名実ともにゆるぎないものとなる絶好の機会を得たわけであります。一九七〇年の終末にその土台をかため七一年新春とともに鯉台風雨の学風を一層きょう誇なものとしてうちたてようではありませんか。

同窓生、学園教職員の皆さん、ゆく年を送りくる年を迎えるにあたりご健康とご発展をお祈りいたします。

園芸農場の近況

園芸農場長　桜井昭利

今年は晩霜、降雹、台風の三大気象災害が無くて、五・六月の低温、多湿、八月の乾燥の影響を大きく受けております。とくに八月の乾燥は少降雨記録をつくった様で、例年は地下水位が高く、むしろ排水に注意する事が多いのに、井戸水も少くなくなって、切角の灌水施設も満足に使う事が出来ませんでした。只、このために、米の減反、転作の影響が蔬菜価格の暴落を招くと言う懸念が、減収による高値となるし、当初予算を大部上廻りそうです。

果樹は既に、学園に適応性の少ない種類を整理して、ブドウ・梨・栗の三種類にしておりますが、ブドウはデラウェアーが主で種無し処理をしております。一時樹勢が落ちて、少数量で数年を過ごして来たのですが、やっと樹勢も回復して再度間伐を必要とする位になって来ております。又、近在のブドウ園が昨年あたりで殆んど転作をして、収穫期のムク鳥の被害がだんだん大きくなって、爆音器では防ぎ切れなくなり、今年は全園にネットを張ってやっと防ぐ事が出来ました。

梨は李のあと地に幸水等を植えてあったのが結実を始めておりますが成木園は市況の低い長十郎、菊水が主体のため、成績があがりません。既に二十五年を経ており、品種更新を考える時と思っております。又、今年は八月の乾燥で、例年の一階級以上小さい位に玉伸びが悪るく、一〇a平均でも三t程度の収量でした。

栗は昭和四十一年の卒業記念として定植した、友部街道沿いの六〇a等幼木園の結実も始まり、ここ数年虫害、胴枯れ、凍害等による枯死樹を少くなくする様につとめて、欠損率も一%そこそこになって、一〇a平均でも二〇〇kgを越えて来ております。

蔬菜は果菜、根菜、葉菜を夫々四・五種類宛六～八作栽培しておりますし、今年の作柄は、八月の乾燥で、里芋・白菜が減収しましたが、他は平年作でした。価格は期節、種類によって大変動をしたために、作型によって、収支に大差を見ております。春蔬菜は一般に安価で、秋には高価になったのですがとくに、大根で春には一本平均三円弱、一〇a一万円にもならなかったのが、秋には平均三〇円にもなって一〇a一〇万円を越えております。

施設園芸は五〇〇m²と規模、設備共に半端ですが、トマト・キウリを主要作物として、メロン・セロリー・花等を試みております。未だ生産、販売共に問題が多い様で、仲々安定したものになっておりません。

その外に普通作として蔬菜との輪栽上、陸稲、落花生を栽培しております。

近年栽培技術、施設の整備によって、気象等環境の支配を受ける事が少くなくなって来ておりますが、以上の様に蔬菜・果樹、共に未だそこまで行っていないし、とくに価格変動については、お手あげです。

従って、施設の整備や、近在の農協との共同出荷等販売方法を課題としております。

酪農場の近況

酪農場長　砂田義雄

冷たい北西風が吹くようになり、櫟の落葉が舞っております。緑一色だった牧草畑も、黄色味を増し始めました。いよいよ十二月、これから三月までは、夏の間に学生諸君とともに、一生懸命貯えたサイレージや乾草と、そして、八月末の乾燥にもよく耐えて、随分大きくなった家畜カブを中心とした、冬型の乳牛飼養となります。

最近は、乳牛頭数も随分と増えて十二月現在七三頭となりました。これも、前任者の久米先生の将来を見通しての計画や、基本的諸施設整備の御努力と、そして、先輩諸兄の御協力の賜と感謝をし乍ら、今後、一層の発展をさせるよう、場員一同頑張っております。

酪農場の状況について二、三具体的に申し述べますと、乳牛頭数は、前述のように、総頭数七三頭、うち、成牛五十頭、育成牛二三頭となっています。成牛の中には随分と長く活躍しているものもおります。なかでも、ポーテージ号（10産）、桔梗二世号（10産）、カスガ号（8産）などがいまだに健在です。牛乳生産では、四五年度計画二五万kgと見込んでおりますが、四月から十一月までの八カ月間に、十七万kg余を生産しておりますので、目標は、ほぼ間違いなく達成できると思われます。これを、一年間搾乳牛一頭当りに換算してみますと、五、五〇〇kg程度になるものと予想しております。

繁殖の方では、年間分娩予定頭数四四頭で、現在までに二九頭産みましたが、昨年に引続き雄子牛の出生割合が高く（六二、一%）なっております。人間社会では、姫二太郎を良しとしておりますが、乳牛社会でもなかなか思うようにいかないものです。

次に、飼料生産についてですが、圃場面積は四二年春に開墾した分も含めて、現在、十二ヘクタールとなっております。十年前までは十町歩以上の農場は大きいと思われておりましたが、最近は、社会

的にも特殊なものではなくなりつつあります、また、酪農場としても、せめて三十ヘクタール位あればと、考えさせられております。旧来の主畜農場を酪農場と改称しましたのが昭和三六年ですが、その当時、圃場面積十二ヘクタール、乳牛頭数三三頭、牛乳生産量七万九千kgでしたから、それから十年目にして、頭数で二、二倍、牛乳生産量では実に三、二倍の生産をあげることができるようになりました。畑の地力も、この十年間に輪作や堆厩肥の増施などによって相当改善されました。本年度の飼料生産計画は一二五万kgとしておりましたが、約十万kg程度の増産ができそうで、一三五万kgの収穫を予想しております。種類別にみますと別表のようです。また、これらの利用の仕方は、放牧利用二二%、青刈四五%、サイレージ二三%、乾草十%と推定されます。

施設の整備については、改善したいことがいろいろありますが、本年度はとりあえず、子牛の運動場の舗装二百平方メートルと場内排水溝の一部を場員と学生との合作によって施設することができました。

酪農場としては、四月から今日まで場員と学生諸君の協力によって、特に大きな事故もなく順調に経過いたしましたが、これからの四カ月間は貯蔵飼料と濃厚飼料の偏重ということもありますので、牛乳生産は勿論ですが、乳牛の健康にも充分注意して大いに成果をあげたいものです。

昭和45年度　飼料生産状況

種類	収穫延面積	収穫量	摘要
牧草類	865a	65.2万kg	オーチャード，イタリアンライグラス，ラジノクローバ，レッドクローバー
青刈麦類	370	15.3	ライムギ，エン麦
青刈トウモロコシ	715	38.9	ホワイトデント，T・C 5号，長文 161号
家畜カブ	175	10.5	下総カブ，小岩井カブ
ソルゴー	55	4.8	ハイブリット，スイート，その他
計	2,180a	134.7万kg	

欧州を一瞥して

教授　築島　宏

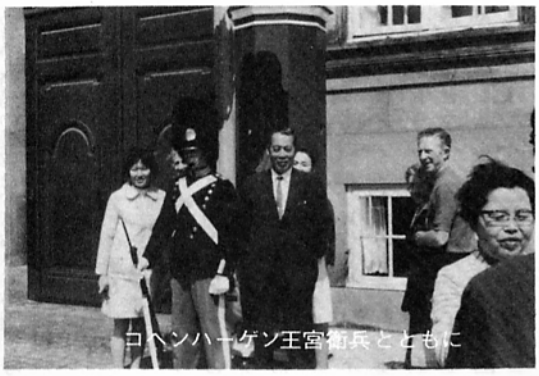
同窓の諸兄、元気で御活躍のことと存じます。小生、今夏機会を得て、短期間でしたが欧州を一瞥することができましたので、二、三土産話を御披露申し上げたいと思います。

七月二四日夜に羽田を飛び立って、往きは北極廻り、帰りは南廻りで、八月十五日帰着まで二三日間。その間、デンマーク、ノルエー、イギリス、フランス、ルクセンブルグ、西ドイツ、スイス、イタリヤと、国数にして八つ。幸い、欧州大陸の方は貸切りバスで、二四〇〇kmを通過しましたので、多少農村にも触れることができました。

一、時刻とは何だろう

七月二四日午後一〇時一五分、羽田をたち、針路を東にとって、時速九六〇kmでとぶ。四時間もすると夜明け。更に二時間経過して、日本航空四三三便はアラスカのアンカレジに着く。時に同じ二四日の午後一〇時。一時間休憩して、北極を越えて、西ドイツのハンブルグに着いたのが二五日の午前六時。経過時間一二時間。

帰りは、ローマ空港を八月一四日に出発して、カイロ、テヘラン、ニューデリー、バンコック、香港と寄港し、寄港の度に時計の針を一時間ずつ進める。丸くて、西から東へ廻っている地球の自転の方向へ、あるいは反対方向へ飛んだ当然の結果であるけれども、時計など見たくなくなる程、時間観念が狂ったというのが最初の印象であった。


コペンハーゲン王宮衛兵とともに

二、ヨーロッパの自然と太陽

今回廻った主要都市の緯度を調べてみると次のようになっている。（すべて北緯）

オスロ	（ノルエー）	六〇度
コペンハーゲン	（デンマーク）	五五度
ハンブルグ	（西ドイツ）	五三度
ロンドン	（イギリス）	五〇度
パリ	（フランス）	四八度
ローマ	（イタリヤ）	四三度
青森（参考）		四一度

ごらんのように、大部分の都市が樺太より緯度は高い。気温は海洋等の影響でさほどではないが、真夏でも、日蔭では日本の秋のような感じである。わが国で、あちらの生活様式にならって背広の上着をつけるのはゼントルマンの礼儀のようにいわれるけれども、夜など上着をつける方が、気候的にいってむしろ自然のようである。三〇度を起す熱気と湿気に悩まされる日本の夏からするとうらやましい限りだが、反面われわれの想像もできない点もある。短かい夏と、少ない太陽光線の恵を求めて、人間も植物も必死だという感じである。日曜休日になると、人々は家族連で海や野原に日光浴に出かける。コペンハーゲンの郊外や、ロンドンのハイドパークでは、海水着もどきの服

装で、老いも若きも日光浴である。つくづく日本の自然はぜいたくだなあと思う。植物も同じである。ともに北欧は、白樺、マロニエ、プラタナス、ネムといった街路樹が多く見られるが、とに角、五、六、七月の短かい夏の間に、万木研を競う。ハンブルグ、コペンハーゲン等のアパートの出窓には、どの家も、細長い植木枠を備えて花を咲かせている。印象的であった。

三、ヨーロッパ大陸バス旅行の印象

八月五日、パリーを振り出しに、八月十一日ローマ着まで七日間、行程二四〇〇kmをバスで通過する。

矢張り、最大の印象は、広いなあということ。パリを出て間もなく、通路は東へ向って全くの一直線。西も東も、北も南も、いつ果てるともなく、地平線の彼方まで、坦々たる大平原。その中をまるで定規で引いたような直線道路が走る。時速平均八〇kmで数十分にカーブが一つといった感じ。この見渡す限りの大平原は、今収穫期に入っている麦と牧草と飼料カブの連続。特別の畦畔らしいものもなく作物のちがいと道路が境界をつくっているという具合である。所々に放牧中の乳牛の群や収穫機を操作する農民が散見される。日本の農村のように、集落らしいものはめったに見えない。この牛は、この人は夜はどこに帰るのだろうと思う。刈りとられた牧草は結束された乾草となって、農場の処々に見える。夕陽が西に傾く頃、この大平原の光景を眺めていると、ミレーの晩鐘とか、落穂拾いの名画が生まれてくる必然性を感ずる。麦秋ということばも、夏と秋が一緒にあるようなヨーロッパの自然にピッタリのことばである。

パリーからルクセンブルグへ、ルクセンブルグから西ドイツへ、それからライン河沿いに南下していくと、ようやく起伏の多い地形になる。第一次大戦の激戦地ベルダンを過ぎる頃から、白ブドウ酒の産地らしく、ブドウ栽培地帯が展開する。品種なのか、夏が短かいせいか確かめる機会はなかったが、日本のような棚仕立ではない。一種の条植で支柱栽培である。アルプスを越え、イタリヤのロンバルジャ平野近にくると、お粗末だが、棚仕立に近いブドウ園が見える。

四、ヨーロッパの雑草

たしか和辻哲郎の「風土」の中で、日本の自然とヨーロッパの自然とを対比して、日本の農業は雑草との斗いだが、ヨーロッパには雑草の障害はない旨の記述があったように思う。もし、日本の農業から、カヤ、チカラシバ、クマザサ、カヤツリグサ等の性の悪い雑草を排除できたら、惰農天国だろうと思う。学園でも毎月行なっている美化作業でもこんな雑草に泣かされている。和辻論文の主張をこの目でたしかめたいと思い、機会あるごとに、雑草に注目して歩いた。結論としての印象は、わが国の路傍三百に比較すると、種類も少なく、上記のような雑草はどこでも発見できなかった。アルプスの北と南とでは、植生にかなりちがいがあるように思えたけれども、素人の小生が確認できたのはスズメノヒエ、スズメノテッポウといった矮性の雑草などであり、路傍の雑草は、そのまま牧草と呼んでいいような良質（?）の雑草が多いように感じた。

五、コイン（小銭）の嘆き

外国旅行で、一番悩まされることの一つはコインの処理だろう。国境を通過して次の国に入るととたんに通貨としての機能を失うからである。イギリスのように、貨幣制度が複雑なところでは、買物をしてもそれが高いのか安いのか見当がつかない。と同時に、単位貨幣のポンドは、フランスでも西ドイツでも銀行やホテルの受付で、それぞれの国の通貨に交換してくれるが、シリング、ペニーになると交換がきかない。それで、あすは国境通過という前夜は、チップ用のコインを残してあとは、煙草、絵葉書、チョコレート、チューインガムなど、無理にでも買い込むことになる。

六、欧州の文化とキリスト教

一番印象に残ったのは何かと問われたら、北欧の朝食の美味しかったことと、パリーのルーブル美術館である。特に後者。縁なき衆生の小生がそう感ずる位だから、絵や彫刻に造詣の深い方々にとっては魅力だろうと思う。ミロのビーナス、ミレーの諸傑作など、一堂に陳列されているのはほんとにすばらしい。

ルーブル美術館は絶対王制時代の国王の道楽の結晶だそうだが、こんな道楽は、今日になってみると貴重な道楽だったといえよう。

それにしても痛切に感ずることは、長い風雪にたえて、現在なお利用されている、数百年を経過した石造の各種建築物、彫刻、絵画その大部分は、キリストに関連したものだということ。キリスト教のヨーロッパ社会における滲透は、われわれの多くのものには想像つかない。別言すれば、ヨーロッパの文化的遺産の理解のためには、キリスト教的教養が絶対に必要ではなかろうかと痛感した。

以上、思いつくままに視察所見の一端を申し上げましたが、旅行を終っての感想は、決してぜいたくな投資ではないこと、日本人はよく働らくこと、さらに、農業の分野でも、生活物資の分野でも、そうわれわれが目の色を変えて吸収しなければならないものは、そうないのではないかということが総合所見です。

以　上

学園通信

会報13号でもお願いしましたが、46年度の学外実習を引受けて戴ける同窓生、また受入可能な農家をご存じの方は、教務課宛に是非ご一報下さい。学外実習要領や学外実習受入農家票をお送りして、ご支援、ご協力をお願い致します。

46年度学生募集要項は、別紙同封致しましたが、近年の出願者数の傾向は減少気味であり、憂慮している次第です。農業を取り巻く諸条件が極めて厳しい昨今でありますから、学園希望者のご推せんも容易ではないとお察ししておりますが、今年も格別のご理解とご協力をたまわり、一人でも二人でも、出願をすゝめて下さるよう、お願い致します。

インドネシアの農業集団指導事業に参加して

教授　坪野敏美

五月ないし九月の五ケ月間インドネシアに渡り、インドネシアビマスゴトンロヨンプロジェクトの日綿実業農業技術指導協力団の一員として、農業指導をする機会を得ました。

インドネシアは一九六八年現在人口一一、四〇〇万の七五%が農業収入によって生活している農業国でありますが、米の生産は一、〇一六万トンにすぎず相当量の米を輸入している主食輸入国であります。政府はこのための外貨支出は国の経済発展の重荷になっているとして、一九六六年ビマス（集団指導）計画を樹立、一九七三年までに米生産を一、五四〇万トンに引上げようという食糧の大増産運動を展開しておりました。ビマスゴトンロヨンプロジェクトはその計画の一つで、インドネシア政府が外国商社と農業資材と技術指導に関する契約を結び、外国商社による契約遂行を通じて食糧増産を達成しようという仕組になっています。

ところが、このビマスゴトンロヨンプロジェクトは、私がようやく落付きかけた五月二十一日インドネシア政府が中止すると発表しました。

その理由として、政府の公式発表したものの外に財政負担の増大、外貨の流出防止、外国企業による農業指導に対する不信感、役人の汚職などがあげられておりました。

財政負担の増大が理由となったのは、ビマス加入農民が政府から肥料・農薬・その他の農業資材を借りて水稲を栽培し、収穫時にその代金を返済することになっていますが、農民は貧しさのあまり米を青田売りし収穫時に米を持っていなかったことや農民の政府に対する不信感から政府に農業資材代金が返却されず、この

関係の赤字が今年までに約百億ルピア（約百億円）に達したためといわれます。米価は収穫時で一kg約三十ルピアですが、青田売りの場合田植時で六ルピア、除草時で七・五ルピア、収穫一ケ月前で一〇ルピアといった超安値で売らねばならぬ程農家が貧しいのです。

外貨の流出防止をせねばならぬ理由は、インドネシアは世界第三位の借金国であること、政府の肥料在庫量は約一ケ年分あることなどにあるようです。

外国企業に対する不信感は、ビマス発足当時から参加していた西欧のある企業によるヘリコプターを使用した害虫防除は、害虫を少なくはしたが農民が期待していた増収に結びつかなかったこと、天敵まで殺し次作において反って害虫被害が増加したこと、外国企業による役人の買収などによると口にされておりました。インドネシアでは政府の役人にも農薬を散布すれば増収すると思っている人がおりました。

役人の汚職は月給の安いことが原因のようです。私達が雇っていた通訳（日本旧軍人でインドネシアに帰化している）は親子五人で、生活費は最低月一万ルピア必要だといっておりましたが、大学卒業者の初任給は月二千ルピア、県の農業普及局長で一万二千ルピア、次席は八千ルピア（米・塩などの現物給与も若干ある）ということです。この国では尿素、重過石、硫加は五〇kg一千二百ルピアで農民に売渡されますが、ブラックマーケットで同じものが六百ルピア位で売られております。これらは農民が政府に代金と返済しないつもりで現金化したものや、役人が帳簿上でそんな農民の名をかたって横流ししたものと話されておりました。

今期始めてビマスに参加した私達チームはその中止をインドネシア政府に抗議しましたが、決まったことはどうすることもできませんでした。したがって私達は、仕事は自分自身のためにあるべきことを思いなおし、折角与えられた九月末まで自身納得できるように頑張ることに致しました。

仕事はインドネシア第三の都市スマラン（人口約六〇万）に事務所をおき、中部ジャワ州の九県を対象に行ないました。チームの陳容は害虫（七月上旬帰国）、病害、栽培、農機具、土肥、各一人宛の五人でした。

具体的な仕事はデモンストレイションフイルド四ケ所における水稲栽培、ビマス加入農家水田の調査と指導、スプレヤーの使用法と分解修理講習、稲作指導者養成講習に分けられます。

デモンストレーションフイルドにおける水稲栽培は、インドネシア政府の希望により政府の推薦栽培法を基本にとり入れて行ないました。政府推薦栽培法ではIRやC四系の多収性品種を使用し、肥料はヘクタール当たり尿素二〇〇kg、重過石四五kg、栽培密度二五×二五糎、害虫防除薬としてダイアジノンまたはエンドリンを使用するよう奨励されております。多収性品種は食味が悪く農家に喜ばれていませんが、米の自給を達成するまでと奨励されておりました。肥料は土壌中に燐酸、カリ共に乏しく、施用効果が

高いにもかかわらず重過石施用量少なく、カリの施用を奨めていません。これはこの国では肥料の全部を輸入に依存しているためと、農民に資金返済能力がないために最も増収効果の高い尿素に重点をおいているためのようです。

ビマス加入農家の水稲栽培指導は県普及局と郡農業技術員が連絡をとりながら行なっておりましたが、私達もこれらの人達と月に一回の割で巡回して水稲の生育状況を調査し、その結果をみて改善点を指導してきました。ここで気付いたことは、この国の指導者特に大学出の若い指導者は自から水田に入いることが少なく、また体験を通じて得た技術をもっていないことです。私達は到着早々水田にとびこみ仕事や調査をやりだしたので、農民は非常に不思議がり、また中学校の生徒は遠くからひやかしておりました。しかしそのうちに互に水田に入いり、泥だらけになって指導することの意味が理解され、ラジオがそのことをとりあげ、この国の指導者も水田に入いり農民を実際的に指導すべきであると盛んに呼びかけていたようです。

あとの二つの講習は、中部州および県からビマスゴトンロヨンが中止になった後のニュービマスでは国内技術者が全責任をもって指導に当たらなければならないが、国内には充分な指導者がいない、是非スプレヤー担当者と稲作指導者のための講習をしてほしいとの要請を受けて六月中旬より始めたものです。

これまでインドネシアの指導者や農民は外国企業による指導事業に不信をもっていたということですが、この頃には日本人のやり方をよく理解し積極的に我々を利用するようになりました。また私達もこれらの人達と一緒に仕事をするうちに大部分の指導者や農民は仕事に非常に熱心であることを知りました。

インドネシアにおける米の増産運動は、先述のような経験を経て、ようやく指導者や農民の自覚に基づいた盛上りをみせてきました。しかしなんといっても指導者層に難点があるようです。このことは県当局もよく知っており、帰国の挨拶廻りの時には二県より日綿に今後の農業振興について具体的な依頼をしてきました。また、外国商社とは絶対に会わないといわれていた中部州知事が私達の帰国間際になって、是非日綿チームに仕事の報告を聞きたいので会いたいとの連絡を受け出向いた際にも、失業者を吸収するための工場の建設と農業指導に関する今後の協力方を依頼されました（この報告の模様はテレビで放送されました）。

インドネシアは人口が多く貧乏国ですから中央政府に対する経済並に技術援助だけに留まらず、第一線で農民と共に泥だらけになって指導できる指導層の育成が是非必要であるように思われます。そのことがインドネシア人が自身の手で国力を盛上げていく原動力となり、そんな指導層の育成にとって人種の近い日本人の役割が望まれているように思いました。

（写真はビマス加入農家の圃場を調査した結果から稲作指導をしているところ）

同窓生短信

秋冷の候　御一同御奮斗の事と思います。当方元気に活躍致して居ります。先日支部長会に出席致し種々御骨折頂き感謝致して居ります。色々と学ぶ事が出来た事を嬉しく思います。

他府県の活動を知るにつけ我々も遅れ馳せ乍らも県同窓生の集いを図り互に手を取り合って活発な行動を起さねばと（過去に於て何回かの呼び掛けは致しましたが集いの骨子も無い為に出席者少く唯単なる有志の集いの様な結果となって居りました）。去る八月二十二日松山にて会合を開きました。幸いにも十二名（約半数）の参集を得正式な支部として発足すべく種々審議を行い規約の制定、その他を決定致し真剣な中にもなごやかな会として進行する事が出来ました。之で一応支部としての基礎造りが出来今後の各人の活躍を期待致して居る次第です。そこで手始めとして本部会費の支部での徴集一括納入を決しましたが何分にも県内同窓生の様子をまだ握って居ない為に充分な動きが取れない状態で納入済の氏名を知らせて頂き未納者に督促し出来得れば全員納入すべく努力致し度く思って居ります。先に書いた如く今迄の呼掛けに全々反応を示さない連中も居り之が何処へ迄進展するかちょっと不安が有りますが、年一年と彼等を引入れるべく努力致す覚悟で居ります。

又、名簿の発行が何時になる迄併せてお知らせ下さい。

先は取敢えず状況報告並にお願いを致します。

尚一層の御奮斗を祈ります。　敬具

十月十七日

愛媛県支部長・一期・大西正章

＊　＊　＊

前略　御免下さい。

同窓会会報十三号をなつかしく拝見いたしました。

学園の内容も、すっかり変わられた様子ですね。

私も一児の母となり、毎日忙がしく過ごしておりますが子供がねむった時など、ぼんやりとして、ふと思い出すのは、楽しく自由だった学園生活のことです。

友達はどうしているかしらと考えアルバムをとり出して見る事もあります。会報はそんな時、なつかしい友人の名前をのせてくれたり、便りを入れて下さるので、本当に楽しみです。次号を楽しみに、お待ちいたしております。

栃木・一九期・斉藤（植木）信子

＊　＊　＊

拝啓

今年も早十月、南国にも秋が訪ずれました。御無沙汰ばかり致しておりますが、先生の方は、御多忙の中にもお元気の事と存じます。

〝同窓会々報〟十三号が届き、学園の状況、又、各地の皆様のこと等知り、〝自分も頑張らねば!!〟と、意を新たに致したところです。

現在、農協にて、生活指導員と名前だけは立派なものを頂いておりますが、なかなか思う様にいかず、どうにか勤めております。

今年の二月より、先輩の指導員の方が、やめられ、一人ぼっちになって、仕事の忙しさより、責任の重さを身をもって感じている昨今です。

〝稲刈り〟を前に、豊作を心から喜べない人に自分は何をなすべきか？婦人部の組織はこんな時どうあるべきか？なんてむずかしい問題につきあたって、整理もつかない有様です。

自分の任務がわかるにつけ、自信もなくします。

各地で活躍されていらっしゃる方を少しでも見習わねばと気だけはあせっていますが……。

この便りがそちらに届く頃は、学園祭でにぎわう頃だろうと、思います。このところ学園内の詳しいことも知らずじまいですが機会があったら、また、鯉渕の土を踏みます。

ところで、同窓会々費の件ですが、卒業以来一度も納入致しておりませんので、近日中に納入せねばなりませんが、どんなになっているのか、お知らせ頂けたら幸いと思います。先生も学園のことと、事務局ということで何かと、せわしいかと存じますが、よろしくお願い致します。

時節変わりの折、お体を大事になさって下さいませ。

お元気で!!

宮崎　二三期生　増田多恵子

S45・10・5夜書

＊　＊　＊

前略　会員名簿の作製について準備されておられるとのこと、小生の勤務先を同封名刺のようにご訂正下さい。　後略

大阪・八期・伊藤伸史（岸和田市役所・農林水産課長補佐）

＊　＊　＊

年の瀬を間近にひかえ、学園では何かとお忙しい事と思います　寒気厳しい鯉渕の里では、かなり冷えこんでいることと思いますが、当地では本格的な冬は正月過ぎごからになりそうです。同窓会の事につきましては長い間御無沙汰ばかりいたし、誠に済まなく思っております。こゝに会費一〇〇〇円也同封送付いたしますのでお納め下さい。又、住所の変更も併せてお願い致します（以下省略）。

鹿児島・通教二期・牧口実男

＊　＊　＊

前略　文化の日も過ぎ、逍遙の候となりましたが、皆様方には御変りもなく御研鑽の御事と拝察申上げます。

扨、此の度は学園通信（会報13号）をはじめ、種々資料を御恵送賜わり、誠に有難く拝受申上げました。新学園長も御決定の由、心から御慶び申上げます。

一方、東畑先生も文化功労賞授与の栄に浴され、誠に慶賀に堪えません。

処で、本日、二期の三浦先輩（カリフォルニア在住）と電話で色々と話合いましたが（小生が御紹介申上げた女性と、十一月十四日婚約、十二月十九日挙式の運びとなり、先輩の親代りとして出席致す事になって居ります）、彼の方ところには全然何も学園から届いておらないとの事で御座居ますので、何卒、御調査の程をお願い申上げます。三浦先輩は終身会費も納入済の事にて、くれぐれもよろしく御願い申上げます。先ずは取急ぎ御礼旁、御願い迄。十一月五日

アメリカ・ロスアンゼルス・八期・近藤金一（三浦氏には、名簿同封、小包便にしたため遅着したものと思われる）

昭和46年度学生募集協力依頼

教務課長　築島　宏

拝啓　向寒のみぎり卒業生の皆さんにはいよいよ御健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、ご承知のように鯉渕学園は、全国から高等学校卒業者を募集して二カ年間全寮生活のもとに教育し、広い視野に立って農業経営や農村生活の近代化、あるいは農家経済の協同組織化などに積極的に活動できる人材の養成を目指してまいりました。

創立以来、今日まで二〇余年本学園の教育方針に御賛同下さる多数の方々の御支援御協力によってすでに二、七〇〇名の卒業者が巣立ち、その活動は高く評価されております。

しかしながら、今日のわが国農業や農村社会は未曾有の大転換を迫られ、その変貌は予想を絶するものがあります。このような情勢の中にあって、広い視野にたって、農業および農村社会の進むべき方向を正しく判断し、地域社会の農業経営や農村生活の改造発展のための中核的役割を果すべく、進んで農村にとびこんでゆく有為の人材を養成するには、もはやこれまでの二カ年制の教育では十分ではなく、どうしても三カ年の教育期間を必要とするとの結論に達しました。もっとも三カ年制についての検討はすでに数年前からすすめてまいりましたが、三カ年制に移行するには、教育施設や教授陣容の整備充実を伴なうことは当然であり、なかなか実現の運びに至りませんでした。

幸い、農林省、農協団体等の御支援を得てようやく三カ年制への移行準備もすすみ、本年度（昭和四五年四月）から、いよいよ念願の三カ年制としてスタートいたしました。昭和四六年度も別紙要項のように、三カ年制として学生募集を行なっています。

つきましては、今年も何とぞ一そうの御理解と御協力をたまわり、これから鯉渕学園に学ぼうとする前途有為の諸君を一人でも多く御推せん下さるようお願い致します。

敬　具